



## 教材としての詩集『青猫』研究(二〇一六年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 那須, しおり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007538">https://doi.org/10.32150/00007538</a>

## 教材としての詩集『青猫』研究

国語科教育第一研究室 三四七六 那須しおり

高等学校国語教科書では、詩教材は一人の詩人につき一編を取り扱うか、あるいは同じ詩人の作品を二、三編取り上げている。実践に関する先行研究では、他の詩編と比較したり関連付けたりして読むことが述べられていた。本研究ではこのような高等学校国語科の詩教材の扱われ方を踏まえ、萩原朔太郎の第二詩集『青猫』から数編の詩を教材として扱い、表現を味わう学習指導の項目を示すことを目的とした。

『青猫』では、詩集を通して「笛」や「水」に関する言葉などが多く用いられている。「緑色の笛」「憂鬱の花見」などにおける「笛」は安らぎのイメージを形成していた。「みじめな街燈」「春の感情」などにおける「雨」は憂鬱や絶望のイメージを表しており、「笛」と「雨」はそれぞれ詩編中で一貫したイメージを形成していた。

平成二十八年度、『青猫』の作品は「現代文B」の教科書に「自然の背後に隠れて居る」の一編が掲載されている。『青猫』の作品を教材として扱う際には、詩集から数編を教材として取り上げると効果的な指導になるのではないかと考える。

詩集の中で複数の詩編同士が結びついていることや、詩集全体を通して一貫したイメージを形成している詩語に気づきながら読む学習指導を目指したい。このことが表現を味わう学習につながると考えた。